

## 農学生命科学研究科の取組について

中西 友子

東京大学大学院農学生命科学研究科 放射性同位元素施設・教授

福島第一原子力発電所の事故から3年が経過し、私共の報告会も9回目となりました。今まで行ってきた研究成果につきましては、以下の農学部のホームページに掲載している通りです。

(<http://www.a.u-tokyo.ac.jp/rpjt/index.html>)、

被災地試験研究は、農地や森林、水産、畜産業ならびに自然環境を対象にした研究なので分野は多岐に亘っています。毎回の報告会では、これらの様々な研究分野の中から数分野を選択させていただき、研究進捗に伴って得られた成果を発表させていただいています。今回は、森林の樹木、土壌、コメとダイズについての結果をご報告いたします。樹木には四季に応じた活動があり、また農作物もその種類や生育環境に応じた研究が必要です。また、特に農作物が年1回収穫されるものですと、事故後、まだ3回の収穫時期しか迎えていないこととなります。このように放射能の環境中での動きは長期に渡って調べる必要があります。私共はこれからも調査研究活動をずっと継続していきたいと考えています。事故後、地表や森林や田畑の表面に吸着した放射性セシウムは、環境中でそのままほとんど動かず、一方、生き物に取り込まれた放射性セシウムは代謝活動によって減少してきています。しかし、放射性セシウム137の半減期は30年ですから、まだその動きを長期的に注視していく必要があります。

また、私共は研究の蓄積とともに、人材育成の一環として、これまで私共が得てきた結果をもとに、学生を対象とした農学放射線教育を開始しました。昨年からはじめたこの教育プログラムは、単に講義を聞くという座学だけでなく、牧場をはじめとする現場における実習も合わせて行うというものです。これには教員も30名以上が加わり、学部および大学院の学生合わせて約160人がこの授業に参加しました。この授業内容の資料もホームページに掲載していますのでご覧ください(<http://www.agc.a.u-tokyo.ac.jp/fg6/top.html>)。本年度は、この授業を、専門課程だけでなく、環境放射線教育として教養課程の学生(1-2年生)も対象に始めました。

このように、被災地支援調査研究結果を多くの方に報告するだけでなく、実際の教育にも役立てつつ、さらに研究を継続していきたいと考えております。